

北海道におけるタンチョウの現状 ～生態と保護の歴史～



吉野 智生 (よしの ともお)

釧路市生涯学習部動物園管理係 学芸専門員

1979年生まれ、千葉県出身。大学時代から野鳥含む自然観察にのめり込み、獣医学部で合法的に野鳥を研究対象とするため寄生虫学を専攻。2009年酪農学園大学獣医学博士。2011年から環境省九州地方環境事務所勤務を経て、2013年より釧路市に奉職。2022年より現職。タンチョウの飼育、研究、標本作製および教育普及を主な業務とし、現在は主に阿寒国際ツルセンター勤務。

はじめに

前回は主にタンチョウの外見や生態的特徴、飼育状況などについて、特に希少野生動植物の保護には、生息域内保全と域外保全があり、主に釧路市動物園で行っている域外保全を紹介しました。今回は生息域内保全の観点を交えて、野生タンチョウの現状について紹介していきます。

タンチョウの生息地は、現代では北海道東部にかなり集中していますが、過去には北海道内、そして本州にかけて生息していたと考えられます¹⁾。狩猟の対象であり、食料や交易品として、肉や羽毛が利用されていた記録があり、特に明治時代以降は生息地の開発も進み、狩猟圧の増加や生息地の喪失により一度絶滅したと思われるまで個体数を減らすことになりました^{1)、2)}。

その後、1924年に再発見された後に様々な保護活動が行われ、法整備もされて数は少しずつ増え、現在では約1,800～1,900羽が道内に生息すると考えられます^{2)、3)}。近年では道東だけでなく道北や道央でも定着し、繁殖が確認されるようになり⁴⁾、数が増えて分布が広がるに連れ、全てを見つけるのは困難になってきました。しかし保全策を立て、進めていくにはある程度正確な数の把握が必要になります。さて、絶滅の危機は数が増えれば解消されるのでしょうか。残念ながら、そんなに単純な話でもないのです。

タンチョウの保護と給餌の始まり

厳冬期にはタンチョウに給餌を行っていることが知られています(写真1)。これは、餌が不足する厳冬期にあってタンチョウの餌を補うためのものです。当初、タンチョウへの人工給餌は、専用の畑を作ったり、ドジョウなど魚の養殖、放流を行ったりしたことが始まりとされます。ただ実際に人工給餌が成功したのは1950年の厳冬期に阿寒町の農家がトウモロコシを与えたことだとされています。その阿寒町には1977年に給餌場に隣接してタンチョウ観察センターが建てられ、やがて大規模な給餌が行われるようになりました^{1)、5)}。タンチョウは多い時で1日300羽程度が飛来した記録があります。厳冬期に集まってくる多くのタンチョウは、地元にとって重要な観光資源にもなったのです。なおこの観察センターは、老朽化のため2024年度をもって役割を終え、閉館となりました。

現在、タンチョウの人工給餌は環境省の保護増殖事業に基づいて、釧路市と鶴居村にある環境省委託の給



写真1 給餌場の様子

餌場、すなわち阿寒給餌場、鶴見台、鶴居伊藤タンチョウサンクチュアリ、これらを3大給餌場とも呼びますが、主にここで行われています。他に北海道が委託する釧路市の音別給餌場、標茶町の^{しべちや}中茶安別給餌場と、その他にも釧路、根室管内に約20か所の小給餌場があります。

給餌の現状と、給餌量調整

さて近年、特に2000年以降ですが、高病原性鳥インフルエンザ（HPAI）をはじめとする、野生動物に大量死を引き起こしうる感染症が問題となりました。特に群れになる鳥や、希少種では感染した場合のリスクが高いため問題視されています。国内外のツル類では大量死事例が出ていますし、タンチョウの死亡例も2022年以降断発的に確認されています⁶⁾。幸いにして、まだ給餌場での大量死は発生していませんが、備えは必要です。

タンチョウの個体数は過去に比べれば増加しました。一方で感染症のまん延リスクを下げるには、給餌場など限られた場所への集中の緩和が課題となります⁶⁾。そこで2014年度以降、リスクの低減や生息地の分散化を促すことを目的として、タンチョウ生息地分散行動計画の一環として給餌量の調整が始まりました⁷⁾。

収容された健康なタンチョウの死体を基に計算すると、冬季間（11月～2月）のタンチョウの体重は平均約8.6kgで、少々乱暴な計算になりますが1日当たりの必要エネルギー量は約860kcalです⁸⁾。また、タンチョウは一日に約600～1,000粒程度のコーン（概算約300g）を食べているという給餌場での観察記録があります⁹⁾。このあたりの数字をベースに、総量を少しずつ制限し、また、実際に撒く量を飛来数に合わせていったわけです。

なお阿寒給餌場ではコーンの他に活魚（ウグイ）も与えていましたが、北海道の野鳥でHPAIが確認されるようになったことから、2014年度以降はコーンのみに変更しました。魚にはタンチョウ以外に、オジロワシやオオワシ、カラスなど様々な動物が集まるため、

多種の動物が接触する機会を減らすためです。カモ類やハクチョウ類は可能な範囲で追い払いを行い、タンチョウとの接触を減らすようにしています。加えて給餌場近くのねぐらの監視も行い、タンチョウの異常行動が見られないかを確認しています。給餌量自体は、2014年度を最大として少しずつ減らし、調整開始から5年かけて半量に、さらに5年かけて少しずつ減らし、現在は次のフェーズに入ろうとしています（図1）。給餌期間（11月中旬～3月上旬）中の延べ飛来数や、日最大飛来数も約半数となっていますが、タンチョウの保護や、感染症のリスクの低減という観点からは必要なことと考えます。給餌は、タンチョウを集めるために行っているわけではないからです。一方で、給餌場から離れたタンチョウがどこに行くのか。繁殖への影響があるのかも注意が必要です。冬の調査では、全体の幼鳥率は約10～13%とされますが¹⁰⁾、年によってばらつき、給餌場では10%以下だった年もあります。他に越冬環境の整備や、農業被害対策、地域での給餌の在り方、撒き方や時期など、まだ課題は残されています。ここからは給餌場周囲のタンチョウの様子や動きも踏まえながらより慎重に、協議しながらいろいろと試行していくことになります。

阿寒での取り組みを少し紹介しましょう。2018年度から、阿寒国際ツルセンターのビオトープ（生物生息空間）、ここは水が枯れていたのですが、隣接する河川からポンプアップして湿地を復活させました。ここを冬でも凍らないようにすることで、少ないながらもタンチョウが自然の餌を採れるようにする試みを始めています¹¹⁾。また、現在の給餌は、群れの密集をなるべく避けるためにトラクターで広くコーンの粒を撒く

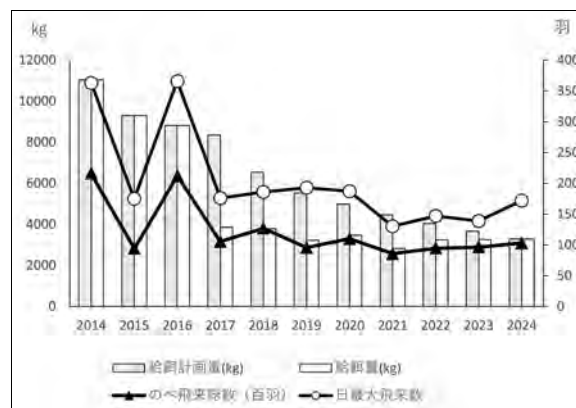


図1 阿寒給餌場における給餌量と飛来数の推移（平成26年度以降）

形をとっていますが、給餌開始当初はニオ（トウモロコシの収穫後の茎を束ねて立てたもの：写真2）にコーンを設置していました。このニオを設置することで、給餌の歴史や給餌方法について学び、検討する機会につながればと思っています。



写真2 ニオ（阿寒国際ツルセンター提供）

生息域拡大とそれに伴う課題

さて、話が少し変わりますが、当園の役割の一つとして死亡したタンチョウの検査があり、これも環境省から委託を受けて実施しています。どこで、どのように収容され死んだのかを調べ、標本の保管や分析を行っています¹²⁾。開園以前からの古い記録を合わせると、2022年度までに1,056件ありました。2000年度頃、タンチョウが約1,000羽を超えたあたりから収容数が増加傾向にあり、近年は年間約50件の収容例があります(図2)。約4割が幼鳥です。収容要因は様々ですが、大半は何らかの人為的事故です。特に多いのが交通事故、列車事故、電線衝突の3つで近年は交通事故が特に多く、また、スラリーラグーン（牛のし尿溜め）への転落や、鹿よけネットやバラ線への絡網なども2000年代から増えてきました(図3、4)。

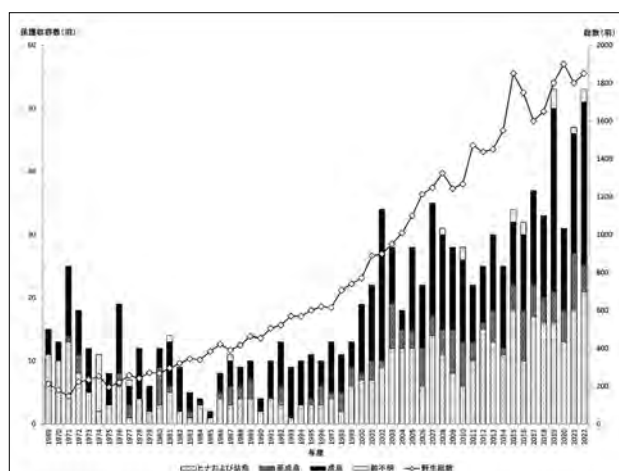


図2 タンチョウの生息数と収容数の変動(1969-2022)

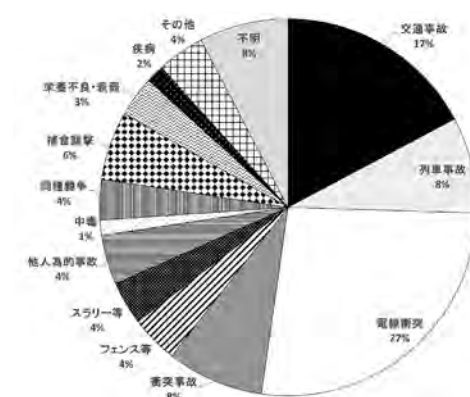


図3 保護収容要因内訳

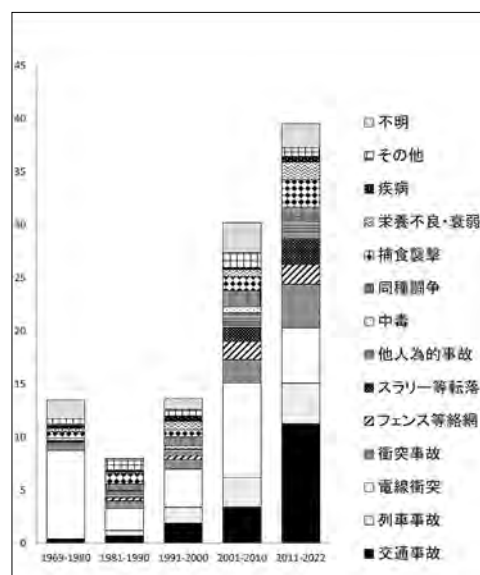


図4 年別保護要因(平均値)

収容地域も拡大しており、当初は阿寒町や鶴居村での収容が多かったのですが、徐々に標茶町や浜中町、厚岸町など阿寒、鶴居以外の釧路管内、十勝管内や根室管内での収容が増えてきました(図5、6)。また、死亡個体の胃内容物を調べると、カエルなど自然由来のものも多いですが、コーンなどの農作物も多いです。金属片やプラスチックなど異物も出てきます。畑を利用していることや、プラスチック等のゴミがタンチョウの生息地にも増えていることがわかります。

タンチョウは湿地の鳥と言われますが、現在ではかなり農業、特に酪農家に依存する個体が多く、堆肥場や牧草地、コーン畑などをよく利用します。開発等に

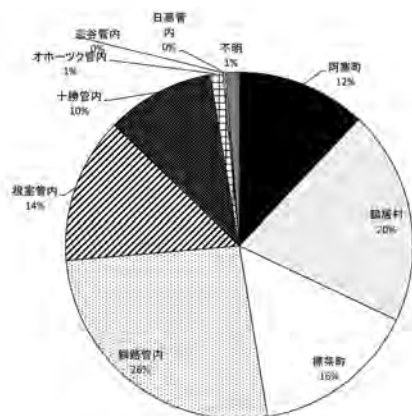


図5 收容場所内訳

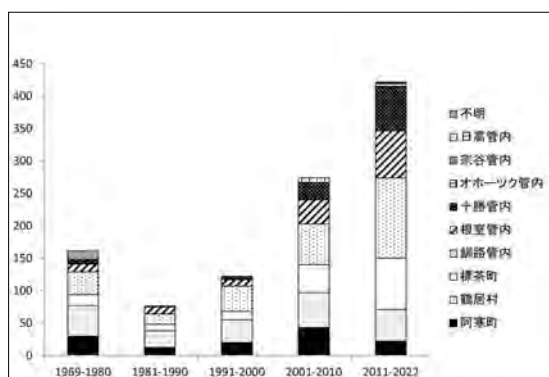


図6 收容地域の推移 (全体)

よる生息地の減少や、個体数増加による密度の上昇が背景にあると考えられますが、湿地から里へと生息地を拡大してきているのが現状です。このように、人の生活圏とタンチョウの生息域が重なってきたことで、事故や農業被害の発生、増加も課題の一つとして挙げられます。事故を防止するためには、特に人間側が現状を知ることが重要です。

これからもタンチョウと共生するために

上述してきたとおりタンチョウは希少種として保護を受けて絶滅寸前から回復し、過去よりも個体数は増えてきました。一方、生息地である湿地や農地は現在でも開発や、あるいは離農などにより変化しつつあります。特に近年のメガソーラー事業や、農地改良、高速道路や河川の工事など、タンチョウの生息地付近で行われる開発は様々なものがあります。他方、道央では遊水地の整備や、それに伴って地元からのタンチョ

ウの誘致が行われています^{5)、13)}、日高地方や宗谷地方においてもタンチョウの新たな生息地が発見され、生息域は少しずつ拡大しています。

タンチョウは大型で、寿命が長い鳥です（現状、野生の最年長は34歳：1991年標識オス）。まあ鶴は千年、などと申しますが、流石にそこまでではありません。ただ、江戸時代より前から、人とタンチョウは様々に関わってきました。今後もこの美しい鳥とともに生きていくには、何が必要でしょうか。

生息地の保全などの自然環境の整備はもちろんですが、タンチョウの生息地近くに住む人々に、共に生きようと思っていただかなくてはなりません。まずはよく知ってもらうことです。そのために、タンチョウに関する知識や現状についての情報、課題となっている事故や農業被害の現状や対策などについて、標本やデータ等を利用し、正確な情報に基づく丁寧な情報発信、普及啓発が必要となります。一方で、万一の備えとして遺伝的多様性を保持した飼育下個体群の維持や、情報の蓄積とその分析も求められるでしょう。今後人間とタンチョウがどのような関係を築いていくのか、課題は様々にありますが、タンチョウの生息地にある動物園として、この美しい鳥がいつまでも傍らで見られるように、活動が続けられたらと思っています。

引用文献

- 1) 久井貴世 2009. 酪農学園大学生物多様性保全研究室紀要1: 5-151.
- 2) 正富宏之 2021. モーリー58: 10-15.
- 3) タンチョウ保護研究グループ・釧路市動物園 2018. 阿寒国際ツルセンター紀15: 3-20.
- 4) 正富欣之 2021. モーリー58: 16-19.
- 5) 叢書編さん事務局 1976. タンチョウの釧路. 釧路市
- 6) 日本ツルコウトリネットワーク 2024. 高病原性鳥インフルエンザに関する会議報告書. 日本ツルコウトリネットワーク.
- 7) 北橋隆史 2021. モーリー58: 28-31.
- 8) Nagy, KA. 1987. Ecological Monograph 57: 111-128.
- 9) 日本野鳥の会 2011. 2008年度鶴居伊藤タンチョウサンクチュアリ年次報告書.
- 10) 正富宏之ほか 2017. 阿寒国際ツルセンター紀14: 3-26
- 11) 吉野智生 2020. カッコウ422: 12
- 12) 釧路市動物園 2015. 開園40周年記念誌「あゆみ」 釧路市
- 13) 深沢 博 2021. モーリー58: 20-23.